

景観フォーラム

日本景観フォーラム会報 2号 (2011年7月1日)

巻頭言

ヒューマンスケールの観点で

本年(2011年)3月11日東日本大震災を期にすべてが根底から変わったような気がいたします。被災していない人達の日常生活はさほど以前とは変化していないかもしれませんが、この日の以前と以降ではものの見方が大きく衝撃的に変わりました。自然の優しさに恵まれた日本列島に突如向けられた津波という自然の刃。何万という人命を一瞬に奪い去ってゆく自然の脅威。人間が創り出してきた文明の儚さに身震いするとともに、それでも私達は自然のなかで生きてゆくしかありません。

思うに近代以降の科学文明は自然を支配することを進歩と名付け、それが善いことであり後退することは悪であると考えて参りました。ほんの500年の間に、この考え方は建築物などを筆頭に色々な人為的なものを当然のごとく肥大化してまいりました。そして科学文明の到達点は人類には制御できない原発事故という無残な姿になり果てました。

当団体は人間の生活にとって本来の豊かさとは何かという問いの下に、ヒューマンスケールという観点から“景観から考えるまちづくり活動”を真に豊かな日本社会創造のためにお役に立ちたいと考えております。皆さまの積極的なご支援の程をお願い申し上げます。

齊藤全彦



東京都庭園美術館前の遊歩道(東京都港区)



バリ島の棚田

お知らせ

●今後の日程

◇高麗川ホテル鑑賞の集い

日時: 7月2日(土) 13:00~19:00

場所: 飯能市吾野宿

集合: 西武秩父線吾野駅前(13時)

当会は、主催者の吾野宿再生と吾野を語る会と協働で吾野宿の景観形成とまちづくりを推進しています。

◇定例研究会 日時: 7月20日(水) 18:30~

場所: 喫茶室ルノアール四谷

テーマ: 景観法と住宅デベロッパーからのまちづくり

講師: 山崎 晃弘(建築家)



船上のディオニュソスが描かれた酒杯(前540~535年)

研究会から

「景観協定」とは？

「府中市の景観形成について」(2月17日の研究会より)

これまでの研究会で話題になったテーマをもう一度取り上げて、違った角度から考察してみたい。今年2月の定例研究会では、府中市都市整備部計画課の楠本課長補佐から「府中市の景観形成について」というテーマでご講話いただいた。府中市は、一昨年、景観行政団体の訪問調査で訪問し、役所の担当者から説明を聞き、市内を視察した。市役所の隣には2世紀初めの創建されたという大國魂神社が厳かに位置している。退所後はそのまま厄を祓い、市内の景観散策ポイントとなるけやき並木をおよそ時速2キロのペースで移動。途中、老舗食堂の吉田屋で食事休憩をとった。この食堂について一言言及しておく、創業は大正時代、内部は講堂のように広く、格間の天井が眩しい。献立も駅前食堂風に和洋中華、あらゆる我が儘族の嗜好にも対応しており、大衆食堂路線の王道を歩んできた風格が備わっている。(ちなみにこのときには、トンカツ定食を食したが、三枚肉風の軽薄な肉の食感が学生時代に入った大衆食堂の定食を思い出した)

さて、本題に移る。府中市の講話では同市の景観まちづくりの取り組みが担当者の口から子細に語られたのだが、他のまちとちよいと違うぞと思わせたのが、景観協定の拡大に積極姿勢を見せたことだった。

景観協定は、景観づくりに地域の特性を生かしていくために、地域住民自らルールを定めてゆく制度で、景観法にも位置づけられている。府中市には、現在4カ所で景観協定が締結されており、これはおそらく協定成立数ではかなり多いと思う。

景観協定は「住民合意」が前提となるので、一定の地域に対してその土地の所有者が多くなればなるほど成立が困難になる。ただ、土地所有者または開発者(ディベロッパー)が分譲前に景観協定を定めれば、所有権移転しても協定の内容は継承されるので、景観は維



持される。良好な景観が将来にわたって維持できれば不動産の価値や評価を高めることになり、所有者にとってもメリットになる部分が多い。

府中の場合もそのようなケースで業者が分譲したケースがあり、まだ、完全な「住民合意」「住民総意」による景観協定というケースではないかもしれないが、この実績を積み上げることで、この条例は金科玉条として、街の景観を未来永劫支えることだと思う。

たとえ、狭隘な地域であっても、このような住民の自主的なルールづくりが拡大すれば街は着実に変貌していくであろう。ただ、景観法は建築・建設上のルールなので、それだけで地域の個性や歴史的な観点から景観を守ることにについては、それだけでは難しい。昔ながらの町並みを残すとか復活させるということについては、教育やコミュニティ形成の問題が深く関わっているので、やはり、地域住民やその地域に関わる人が積極的に関わって、主体的総合的に考えていかななくてはならない。一方、行政の方も、景観づくりにおいては(景観法を管理する都市整備課だけに委ねるのではなく)地域目線に徹し、縦割りではない横断的総合的に問題を解決する姿勢が望まれる。

(豊村泰彦)

緊急報告！～カタル片品村



スローフードとかスローライフなどの考え方は、その土地の伝統的な食材や食文化を愛好し、時間に振り回されずゆったりを楽しむ生き方を目指す運動を呼称するようだ。スローフードはイタリアのブラという3万人弱の町が発祥の地だそうで、今や世界的に有名になっている。日本にもブラに負けないムラがある。それが群馬県片品村である。片品村は日光や尾瀬にも近く観光地としても人気があるが、なんとと言ってもスロー〇〇がよく似合う。反対に、片品村に相応しくないもの。それは「競争社会」「ファーストフード」「チェーン店」「コンビニ」「24時間営業」「昼夜逆転」「ネオンサイン」「監視カメラ」などである。

つまり、これらのものが全くなくても、全然ノープロブレムなのだ。夏季であれば、眠くなったらその場で横になってゴロンと横になって、ウサギを追いかけている夢を見ればよい。では、具体的に片品村のどこが違うか？まず森が違う。畑が違う。家屋が違う。屋根が違う。壁の色が違う。信号機だって違って見える。キリがない。

同じビールを飲むなら、雑居ビルの3階とか4階でより、綺麗な空気のところでも蛍でも眺めながら飲みたい。イタチやタヌキと一緒に自然に囲まれたところで酔いたい。もしそういうスロー〇〇に憧れている者がいたら直ちに片品村へ向かうべし。(T)

(写真:遊楽木舎(ゆうらぎしゃ)の農場)

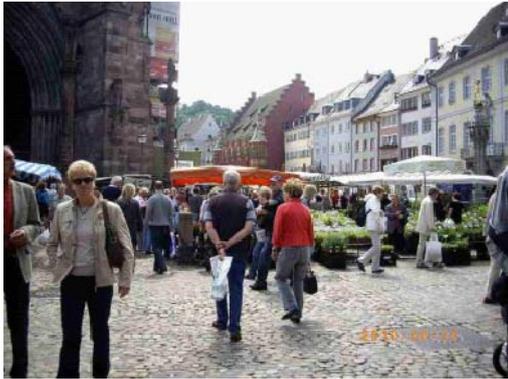
ケイカン・ドット・コラム

ドイツ環境首都フライブルクのまちづくり

私は、昨年6月に「英国のガーデンシティとドイツ環境共生都市視察ツアー」を企画し、幸いに12名の申込みを頂いたので、私自身ツアーコンダクターとして同行し、かねてから興味を抱いていた世界的に有名な環境都市、フライブルクを実体験する機会を得ましたので、ごく簡単にレポートいたします。

まず第一に、フライブルクの印象は、“聞きしに勝る環境共生都市”であったことです。

フライブルクの旧市街を走るトラム



朝市で賑わう大聖堂前広場

その理由は、街の主要部分ほとんど路面電車（トラム）で行くことが可能である。自転車専用道路が完備しているため、自転車で街の中心部まで自動車やトラムと時間的差がなく行ける。自転車が主要交通機関の役割を果たしている。カーシェアリングが発達しているため、自家用車を保有しなくても不便ではない。特に環境共生住宅地として有名な“ヴォーバン地区”の自動車保有率はなんと、1千人中85台という少なさである。その“ヴォーバン地区”では、平らな家の屋根には、屋上緑化が義務付けられている。斜めの屋根には、ほとんどソーラーパネルが設置されている。などなど、数え上げたらきりがないほどである。

フライブルクのもう一つの印象は、“住民参加によるまちづくりが成功している”ということであった。

フライブルクは人口22万人あまりのドイツの一地方都市であるが、町の中心部は平日の昼間にも関わらず、観光客や地元の人で賑わいを見せている。（日本の同程度の地方都市であれば、中心街はシャッター通りと化している。）大聖堂前広場や住宅地の空き地などで、近郊農家が農作物を持ち寄り、マーケットが開かれている。（大型スーパーは法的規制により近郊に開店できないようになっているとのこと）

新興住宅地である“ヴォーバン地区”の住宅は、ほとんどが連棟式住宅で、それらのなんと70%がコーポラティブ形式で建てられたものである。それぞれの住宅は独自のデザインとカラーを持っているが、街並み全体として統一感がある。などです。

なお、フライブルクのまちづくりについて詳しく知りたい方は、現地で視察のコーディネートをしていただいた村上敦さんの著書「フライブルクのまちづくり」（学芸出版社）をお読みになることをお勧めします。

グローバル研修企画 小林 均

ブックレビュー

『街並みの美学』 『続・街並みの美学』

芦原義信著
岩波現代文庫
2001年刊（初版1979）



本書はかれこれ30年を生きてきた秀逸な景観論であり、著者は戦後いち早く都市景観の重要性を主張してきた。この書の狙いを著者は次のように言っている。「当時（1979年）は都市の経済的発展のみが目標で、ヨーロッパの都市のように、町の中心に広場をつくったり、彫刻を設置したり、軒線をそろえるというアイディアは皆無であった。…自分の土地に自分だけの考え方で建築をつくるということが主体で、まち全体の美学という考え方には到底ほど遠い現状であった。ここでわれわれ日本人も、都市全体のことを考えて、少しでも美しい街並みを創るべく、一人一人が努力すべき時代が到来したと思える。」著名な象牙の塔の建築家が日本の建築界には街並みに対しての「美学」というものがまったく欠如していたという指摘は正直な話であり、若干気付くには遅すぎた感がある。

それでは、なぜこのような美学が必要であるかという抽象的・哲学的議論に著者は敢て参画しようとはせず、あくまでも建築家としての具体的事例研究に終始する。例えば「建築における最も大切な境界は壁の存在であろう」即ち、建築の空間領域の問題として壁から始め、街路、広場、街路と建築との関係、そしてこれらの概念を用いて世界の街並みの具体的分析を実践する。続編では景観問題そのものを取り扱う。西洋建築と日本建築を比較して、壁の建築と床の建築との比較検討から景観への影響を論じる。そして、景観の構成、コミュニティとプライバシー、景観の中での商店街の役割、都市空間の演出等々を論じ、都市美化を実践するとは何かに至り、最後に世界の街並みの景観分析を実践する。この本はまさに景観の匠の指南書であり、美学の本ではない。（斉藤）

夢に描く斑尾ミュージアム

私は34年前に長野県の斑尾尾高に建てたペンションに移り住んでいます。3年前までは東京で会社経営をしながら家内と二人三脚でペンション経営を続け、東京と斑尾の生活を楽しんできました。30年以上同じオーナーのペンションは斑尾では稀な存在となっています。

今、こちらで問題化しているのは廃屋となったペンションでペンション村の景観を著しく損ねています。所有者の所在が掴めないケースや掴めていても処分の費用が多額で取り壊しができないケースが多々あります。

うちの近くにもそのようなペンションがあり、豪雪のために屋根が抜け落ち無残な姿となっています。新幹線の新駅完成が近づくなか、誘客の積極的施策が打ち込まれる反面、こうしたマイナスの要因の除去が急務となっています。地元自治体でもなかなか妙案がなく、手が出せない状況が続いています。皆様のお知恵を拝借したいと思います。

一方、町おこしの動きには積極的に関与し、自分のペンションのみならず、斑尾全体の宿泊施設、最近では広域的な連携で全国的なイベントを打ち出しています。

豊村さんたちと7年前に「ふるさと合唱交流会」を5年前に「斑尾ジャズ」の野外フェスティバルをスタートさせ、観客無料、舞台上で演ずる人の参加費で成り立つ持続的参加型市民協働イベントを運営しています。毎年、250名前後のコーラスのメンバー、ジャズ演奏家が斑尾に終結しています。



合唱は作曲家服部公一氏、ジャズはジャズ評論家の瀬川昌久氏をゲストに招いています。

このイベントモデル「斑尾方式」は昨年創設した「信越五高原ロングライド」に応用され、125kmの上信越国立公園内のコースを数百名の自転車ライダーが駆け抜けます。新潟・長野両県にまたがる広域連携がスタートし新しい観光資源の創出に貢献しつつあります。この企画は国の「日本サイクリング協会」の目に止まり共催となっています。これらの企画は多くの人を呼び込み、大自然と人の調和した新景観を生み出してくれることなのでしょう。それは夢に描く斑尾ミュージアムなのです。

←斑尾ジャズコンサート風景 日本景観フォーラム監事 新山 敏



ふおーらむひろば

つぶやく人

府中市がホームページで公開している景観協定活用の手引きというのがあるんですが、その中に、「景観協定で定めることができる事項」として、工作物の位置や構造、形態意匠の例が載っていました。してその中に「電線は地下埋設とし、電柱による架空配線を行わない」というのが列記されていました。てことは協定でこの項目を定めれば電線は地上から消えるんですかね。東電さんにも電線埋設の義務が生じるのでしょうか？そんなすばらしい協定ならどんどん広げていってほしいものですね。

特定非営利活動法人 日本景観フォーラム
〒152-0011
東京都目黒区原町2-8-14/パレ洗足301
TEL 03-6802-7331
FAX 03-3793-9192
E-mail info@keikan-forum.com
ホームページ: <http://keikan-forum.com/>

<近況報告>



博物館・美術館計画のコンサルティングを生業として約40年が過ぎた。振り返ると1980年から90年代は博物館の建設ラッシュで日本全国を飛び回り多くのミュージアム造りに携わった。また、現在は、80年代にフランスのエコミュージアムに出会って「もの」に重点を置く今までのミュージアムから、「人」に重点を置く新しいミュージアム理念の普及に努めている。エコミュージアムは、地域の一定のエリアをミュージアムととらえ地域を振興させるのが目的のミュージアムである。地域の良さを歴史・文化、自然、産業の中から浮き彫りにし、地域の未来を創造するミュージアムである。

現役を退き、研究顧問となった今危惧するのは、人も予算もなく苦境に陥っている多くのミュージアムの姿である。厳しい経済状況の中で文化戦略もなく縮小していくミュージアムは、今こそ住民参加が基本のエコミュージアムで再生していくことが必要ではないかと考えている。

日本景観フォーラム理事 / (株) 丹青研究所研究顧問
里見 親幸